

「生きる力」の自己評価の現状

ベネッセ教育総研 小林 洋

はじめに

今回の「生きる力」の調査は、2001年の「新しい学力を育む教育調査」の中で行った調査項目をベースとして、これに部分的な改訂を加えて、「学力向上のための基本調査」の一環として「教科学力」や「学びの基礎力」などの調査と併せて実施したものである。前回の調査では、「生きる力」の自己評価は4つの領域（能力・スキル、社会への適応力、態度・価値観、自己成長力）について計40の設問で行ったが、今回の調査では、調査ボリュームの制約から30の項目に絞って調査を実施した。また、設問項目のカテゴリについても若干の検討を加え、「問題解決力」「社会的実践力」「豊かな心」「自己成長力」の4つの領域へ再編を行った。（前回の調査についての詳細は、田中博之監修／ベネッセ文教総研編『21世紀型の学力を育む総合的な学習を創る』（2002年）を参照。この報告書の全文は、ベネッセ教育総研のWebサイトで参照できる（※下欄）。

「生きる力」をどう捉えるかについては、い

ろいろ議論があるだろう。教科学力や健康・体力、さらには今回提唱している「学びの基礎力」を含めて「生きる力」に含めるべきという考え方もある。むろん、そのように定義することもなんら不可能ではない。しかし、肝要なことは、「生きる力」の範囲をどう括るかの議論ではむろんなく、21世紀社会の中で求められ、子どもたちに育む力として大切さを増しているものでありながら、これまでの学校教育の中で明確には意識され重視されてこなかった力を具体的な内容で示すことであり、その実態を世に問い、かつ、従来の教科学力との関わりも踏まえながら、それを育むために必要な手立てを明らかにしていくことであろう。

本節では、「生きる力」の自己評価の結果を、前回の調査結果との比較を一部交えながら概観し、その実情をつかむことを第一とし、「生きる力」を育てるための学習活動を考えるデータと材料を提供することを考えたい。

1 「生きる力」の4領域の状況

(1) 「1. 問題解決力」に関する回答結果

「問題解決力」には、課題を発見し設定する力（課題設定力）、この課題について調査する計画を立てる力（企画実践力）、初めて会う人とも話ができて情報を引き出す力（コミュニケーション力）、インターネットなど現代的ツールも使用して情報を収集し活用する力（情報活用力）、筋道を立てて論理的に考え自分なりの結論を導く思考力（論理的思考力）や大事なことがらを決

める際の判断力（判断力）、自分の考えや意見をわかりやすく相手に伝える力（自己表現力）などを必要な構成因子として考えることができる。問題を解決するために求められる資質や能力とは、本来、総合的なものであって、問題が高度であればあるほど、個人や組織に求められる能力は総合性と水準を高めていくことになるが、ここでは、「問題解決力」を狭義に捉え、この領域に含まれる因子として前述のような項目を操作的に含めている（他の領域についても同様で

「学力向上のための基本調査」の設計と結果概要

■図表2-4-1 「生きる力」の児童・生徒による自己評価の回答結果

回答件数：小学5年生 1,705件 中学2年生 2,002件

■1とても ■2まあ ■3あまり ■4まったく ()…その他(その他には無回答が含まれています。)

生きる力に関する設問	小5 (%)					中2 (%)						
	100	80	60	40	20	0	0	20	40	60	80	100
1 問題解決力	課題設定力	0.0	34.5	47.2	12.9	15.4	0.0	10.5	36.5	42.8	10.1	0.0
	企画実践力	0.0	8.3	40.4	39.8	11.5	0.0	6.4	29.2	49.4	15.1	0.0
	調査研究力	0.0	29.2	47.8	17.5	15.5	0.0	13.5	43.7	35.8	7.0	0.0
	作品制作力	0.0	7.5	27.5	42.2	22.8	0.0	12.2	38.2	38.1	11.4	0.0
	論理的思考力	0.0	8.2	39.4	43.0	9.5	0.0	9.6	38.4	44.8	7.1	0.0
	判断力	0.0	9.9	37.8	41.9	10.4	0.0	13.8	47.3	31.2	7.7	0.0
	自己表現力	0.0	8.4	40.8	42.3	8.5	0.0	37.2	48.6	8.2	0.0	0.0
	コミュニケーション力	0.0	11.3	31.8	32.7	24.2	0.0	17.7	33.9	35.3	13.0	0.0
	メディアリテラシー	1.1	14.6	14.5	35.1	34.7	0.0	37.8	40.8	12.4	8.0	1.0
	情報活用力	0.1	16.2	31.7	34.0	17.9	0.0	15.1	32.6	37.4	14.9	0.0
2 社会的実践力	協調性	0.1	25.8	49.2	19.5	15.5	0.0	14.5	47.1	31.0	7.4	0.0
	トラブル解決力	0.1	15.6	41.9	30.7	11.7	0.0	7.6	28.3	44.6	19.5	0.0
	社会対応力	0.1	9.2	28.1	40.2	22.4	0.0	19.2	41.1	32.3	7.5	0.0
	共生力	0.1	15.6	32.4	31.0	20.9	0.0	13.8	28.7	36.9	20.6	0.0
	社会貢献	0.2	22.5	35.7	26.6	15.1	0.0	12.9	26.8	36.8	23.4	0.0
	公共性	0.2	16.2	57.8	23.5	12.3	0.0	18.9	56.1	22.6	2.4	0.0
	社会参加	0.1	9.8	27.7	33.0	29.4	0.0	11.4	27.9	39.6	21.1	0.0
	責任感	0.1	19.1	48.3	30.3	12.2	0.0	29.7	48.5	18.7	3.1	0.0
	勇気・熱意	0.1	6.3	31.3	42.8	19.5	0.0	12.6	41.4	40.0	6.0	0.0
	思いやり	0.1	9.0	33.5	55.2	12.1	0.0	29.5	44.9	20.1	5.5	0.0
3 豊かな心	創造的態度	0.1	8.7	31.0	38.5	21.7	0.0	14.3	32.7	43.5	9.5	0.0
	楽しむ力	0.1	20.0	37.7	37.4	4.9	0.0	30.2	36.0	27.3	6.5	0.0
	バランス感覚	0.1	25.4	47.4	21.8	15.2	0.0	14.1	46.1	34.1	5.6	0.0
	礼儀・マナー	0.1	12.0	34.5	50.9	12.5	0.0	30.4	46.2	19.6	3.9	0.0
	成長動機	0.1	7.9	27.2	62.4	12.5	0.0	69.2	22.2	6.9	1.7	0.0
	自己コントロール力	0.1	14.4	35.2	39.1	11.2	0.0	9.9	34.2	40.1	15.8	0.0
	自己評価力	0.1	10.9	25.5	34.4	29.1	0.0	20.3	29.2	35.9	14.6	0.0
	自信・自尊心	0.2	14.3	38.5	38.5	8.5	0.0	33.0	45.1	18.2	3.6	0.0
	自己実現力	0.2	7.0	10.8	19.8	62.2	0.0	42.5	25.9	18.5	13.2	0.0
	進路決定力	0.5	16.8	19.5	23.2	40.1	0.0	17.0	27.2	36.9	18.9	0.0
4 自己成長力	問4① 身のまわりのことや自分が体験したことから、もっと調べてみたいことを見つけることができる。	0.0	10.5	36.5	42.8	10.1	0.0	10.5	36.5	42.8	10.1	0.0
	問4② 自分が調べてみたいことについて、そのための計画を立てることができる。	0.0	6.4	29.2	49.4	15.1	0.0	6.4	29.2	49.4	15.1	0.0
	問4③ 調べてわかったことをもとに、自分なりの考えを持つことができる。	0.0	13.5	43.7	35.8	7.0	0.0	13.5	43.7	35.8	7.0	0.0
	問4④ 調べたことや考えたことを、文や絵などにまとめることができる。	0.0	12.2	38.2	38.1	11.4	0.0	12.2	38.2	38.1	11.4	0.0
	問4⑤ 筋道を立てて、ものごとを考えることができる。	0.0	9.6	38.4	44.8	7.1	0.0	9.6	38.4	44.8	7.1	0.0
	問4⑥ 大切なことを決めるときに、しりごみしたり、人の意見に流されたりすることがある。	0.0	13.8	47.3	31.2	7.7	0.0	13.8	47.3	31.2	7.7	0.0
	問4⑦ 自分の考えや意見を相手にわかりやすく伝えることができる。	0.0	37.2	48.6	8.2	0.0	0.0	37.2	48.6	8.2	0.0	0.0
	問4⑧ 大人や初めて会った人とでも、はずかしがらずに話ができる。	0.0	17.7	33.9	35.3	13.0	0.0	17.7	33.9	35.3	13.0	0.0
	問4⑨ 電子メールを使ったり、インターネットに書きこみをしたりする時は、きまりを守ったり、相手の気持ちを考えたりしている。	1.0	37.8	40.8	12.4	8.0	0.0	37.8	40.8	12.4	8.0	1.0
	問4⑩ 調べたことを、コンピュータを使ってまとめたり、発表したりすることができる。	0.0	15.1	32.6	37.4	14.9	0.0	15.1	32.6	37.4	14.9	0.0
	問4⑪ 意見のちがう人とも協力し合うことができる。	0.0	14.5	47.1	31.0	7.4	0.0	14.5	47.1	31.0	7.4	0.0
	問4⑫ もめごとが起こったときには、間に立ってまとめ役になることができる。	0.0	7.6	28.3	44.6	19.5	0.0	7.6	28.3	44.6	19.5	0.0
	問4⑬ テレビのニュースや新聞などを見て、最近の社会のできごとをよく知っている。	0.0	19.2	41.1	32.3	7.5	0.0	19.2	41.1	32.3	7.5	0.0
	問4⑭ お年寄りや障害のある人に、自分から進んで手助けをしたことがある。	0.0	13.8	28.7	36.9	20.6	0.0	13.8	28.7	36.9	20.6	0.0
	問4⑮ 社会がかかえる課題について、どうすればよいかを考えたことがある。	0.0	12.9	26.8	36.8	23.4	0.0	12.9	26.8	36.8	23.4	0.0
問5① 学校や社会のルールを守り、マナーを大切にしている。	0.0	18.9	56.1	22.6	2.4	0.0	18.9	56.1	22.6	2.4	0.0	
問5② 自分が住んでいる地域の活動や行事に進んで参加している。	0.0	11.4	27.9	39.6	21.1	0.0	11.4	27.9	39.6	21.1	0.0	
問5③ 自分がやらなければならないことは、責任を持ってやりぬくようにしている。	0.0	29.7	48.5	18.7	3.1	0.0	29.7	48.5	18.7	3.1	0.0	
問5④ むずかしいことでも、失敗をおそれずに取り組んでいる。	0.0	12.6	41.4	40.0	6.0	0.0	12.6	41.4	40.0	6.0	0.0	
問5⑤ 家族を尊敬し、大切にしている。	0.0	29.5	44.9	20.1	5.5	0.0	29.5	44.9	20.1	5.5	0.0	
問5⑥ いつも新しいアイデアを考えたり、工夫したりしている。	0.0	14.3	32.7	43.5	9.5	0.0	14.3	32.7	43.5	9.5	0.0	
問5⑦ 楽しいことを見つけることが得意である。	0.0	30.2	36.0	27.3	6.5	0.0	30.2	36.0	27.3	6.5	0.0	
問5⑧ 自分とちがう意見も大切にしている。	0.0	14.1	46.1	34.1	5.6	0.0	14.1	46.1	34.1	5.6	0.0	
問5⑨ 「ありがとう」「ごめんさい」が自然に言える。	0.0	30.4	46.2	19.6	3.9	0.0	30.4	46.2	19.6	3.9	0.0	
問5⑩ 自分の力をできるだけ伸ばしたいと思う。	0.0	69.2	22.2	6.9	1.7	0.0	69.2	22.2	6.9	1.7	0.0	
問5⑪ イライラしているときでも、まわりの人の意見を聞くことができる。	0.0	9.9	34.2	40.1	15.8	0.0	9.9	34.2	40.1	15.8	0.0	
問5⑫ どんなことが自分に向いているのかを知っている。	0.0	20.3	29.2	35.9	14.6	0.0	20.3	29.2	35.9	14.6	0.0	
問5⑬ 自分はまわりの人からみとめられていると思う。	0.0	33.0	45.1	18.2	3.6	0.0	33.0	45.1	18.2	3.6	0.0	
問5⑭ 将来の夢や目標を持っている。	0.0	42.5	25.9	18.5	13.2	0.0	42.5	25.9	18.5	13.2	0.0	
問5⑮ 将来やってみたい仕事について、家族と話をすることができる。(※注)	0.0	17.0	27.2	36.9	18.9	0.0	17.0	27.2	36.9	18.9	0.0	

(※注) 中2の設問は、「希望する進路について、自分でよく調べている。」

ある)。

図表 2-4-1 で、各設問において「とてもあてはまる」と回答している割合を見ると、「電子メールを使ったり、インターネットに書き込みをしたりするときは、きまりを守ったり、相手の気持ちを考えたりしている」という設問が最も高く、小5生で35%、中2生38%となっている。「まああてはまる」という回答も含めると、それぞれ、70%、79%となっている。この設問は、情報化社会、ネット社会の中で現代人が身に付けるべきメディアリテラシーの一つを問うものである。必ずしも満足のいく数字ではないと思うが、近年の学校教育における情報教育の一つの成果を反映していると考えられる。ただ、「調べたことを、コンピュータを使ってまとめたり、発表したりすることができる」という設問では、トップボックスの数値は、小5生18%、中2生15%と半減している。しかし、前回の2年前の調査では、「コンピュータを使って発表することができる」の設問に対して「とてもあてはまる」とするトップボックスの数値を見ると、小5生11%、中2生7%であり、小5生で7ポイント、中2生で8ポイント、前回よりも今回のほうがアップしている。前回と今回の設問に若干の違いがあるものの、これは、おそらく情報教育が着実に進展している表れと見ることができよう。(ただし、調査の学校母体と同じではなく、その上、実施時期も、前回と比べて今回は半年以上遅いという違いがあるため参考値の域を出るものではない。以下での比較についても同様である。)

「問題解決力」の領域では、トップボックスの数値で見ても、メディアリテラシーを問う前述の設問のみが3割を超えているものであり、それ以外の設問では、小5生、中2生を通して、高くても20%程度、多くは10%台の自己評価となっている。中でも、「自分の考えや意見をわかりやすく相手に伝えることができる」「筋道立てて、ものごとを考えることができる」といっ

た自己表現力や論理的思考力を問う設問では、小5生、中2生を通して10%未満のレベルとなっており、とくに自己表現力では、「とてもあてはまる」と回答する割合は、小5生9%、中2生6%に止まっている。筋道立ててものごとを考えたり、さらに、うまく自分の考えを表現することには困難を感じている子どもたちが大半なのである。前回の調査と比べると、「筋道立てて」(論理的思考力)では、小5生：前回15%→今回10%、中2生：前回10%→今回10%、「自分の考えや意見をわかりやすく」(自己表現力)では、小5生：前回15%→今回9%、中2生：前回7%→今回6%、となっており、中2生では横ばい状態であるが、小5生は低下傾向を示している。

「問題解決力」の領域に含めた設問の自己評価は、全体として、「生きる力」の4領域全体の中で相対的に低いものが多い。このことは、ここに示したような力を身に付けることが相対的に困難であることが子どもの自己評価を通して表れていると見ることができよう。それだけに、これらの力を育むための手立てが、「総合的な学習の時間」や教科の学習および特別活動など学校教育活動全体にわたるカリキュラム編成において、どの力をどのような場面で育成していくのかの学校としての具体的な方針化と、それを踏まえた具体的な指導法の構築など、小学校段階から系統的に組み立てられていくことが求められている。

(2) 「2. 社会的実践力」に関する回答結果

「社会的実践力」の領域には、「意見の違う人とも協力し合うことができる」という「協調性」や、「最近の社会の出来事をよく知っている」という「社会対応力」、「社会がかかえる課題について、どうすればよいか考えたことがある」という「社会貢献」、「学校や社会のルールやマナーを守る」という「公共性」、「お年寄りや障害

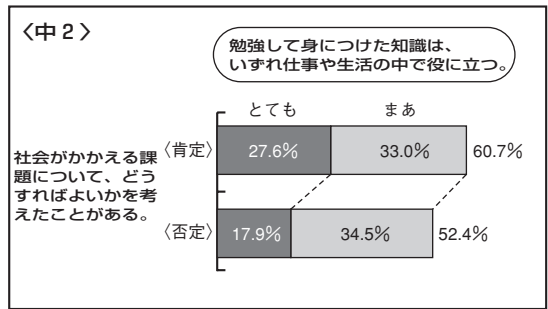
のある人に、自分から手助けをしたことがある」という「共生力」など、7つの項目を操作的に含めている。社会に関わり、他者と協力・協調し合いながら、社会の一員として自覚的に参画していく力を表すものであり、「生きる力」の社会性の側面を見たものと言える。

(1) で見た「問題解決力」の領域と同様に、子どもの自己評価が低いものが全体的に多い。トップボックスの数値を見て、「自分が住んでいる地域の活動や行事に進んで参加している」という「社会参加」の設問が、小5生で30%程度であることを除いて、高くても2割程度の数値となっている。

「意見の違う人とも協力し合うことができる」という設問では、「とてもあてはまる」と積極的に肯定している割合は、小5生で20%、中2生で15%程度であり、子どもたちの多くは、意見の違う人とは物事に一緒に取り組むことが難しいと感じている。また、もめごとには関わりたいくないという傾向が強く見られ、「もめごとが起きたときには、間に立ってまとめ役になることができる」という設問に、「とてもあてはまる」と回答しているのはたかだか10人に1人程度にすぎない。

また、「テレビのニュースや新聞などを見て、最近の社会のできごとをよく知っている」という設問では、「とてもあてはまる」と回答している割合は、小5生で22%、中2生で19%となっており、これ自体高い数値とは言えないが、「社会がかかえる課題について、どうすればよいか考えたことがある」という設問では、小5生で15%、中2生で13%とさらに低い数値となっている。前回の調査と比べると、「テレビのニュースや新聞を見て」(社会対応力)では、小5生：前回24%→今回22%、中2生：前回24%→今回19%とやや低下傾向である(「社会がかかえる課題について」(社会貢献)の設問は前回の調査には含まれていない)。

■図表 2-4-2 社会貢献志向の肯定・否定と「学習の役立ち感」との関係



図表 2-4-2 は、「社会がかかえる課題について、どうしたらよいか考えたことがある」という社会貢献志向を問う設問の肯定群(「とても」「まああてはまる」と回答した子ども)と否定群(「まったく」「あまりあてはまらない」と回答した子ども)との、「勉強して身につけた知識は、いずれ仕事や生活の中で役に立つと思う」という「学習の役立ち感」(学びの基礎力)の設問への回答との関係を示すものである。図表に見るように、「社会がかかえる課題について」の設問に肯定的に回答している子どもは、否定的に回答している子どもと比べて、「学習の役立ち感」を肯定する割合が高いことがわかる。この図表は中2生についてのものであるが、小5生についても同様な傾向が表れている。社会に目を向け社会の課題解決のためにどうしたらよいかと考えることができるような子どもは、学びに社会に役立てようとする志向も高く、日々学習していることが生活や将来の仕事に役立つことを感じ取る機会も多い子どもたちであろう。

社会への関心の低さ、社会貢献の志向の低さは、学習するということが、社会に対してどのような意味をもつのか、ひいては自分自身のキャリア形成にとってどのような意味をもつのかという「学びの価値の認識」を培いにくい土壤となり、このことが先に見た「学習の役立ち感」の低さの背景要因の一つとなっていると考えられる。社会への関心を育てることは、「学んだことを社会に生かす力」が育つ前提条件である。

多くの学校で「総合的な学習の時間」などで、社会の現代的な課題（横断的・総合的な性格を有することが多い）に目を向けさせ、その課題の解決と自分の進路との関わりや生き方を考えさせる取り組みを行っているのも、このような社会的な課題の中に自分への役割期待を発見させ、そこに学ぶ意味を見出させることを通して‘社会的に生きていく力’を育てようとする取り組みと言えよう。

(3) 「3. 豊かな心」に関する回答結果

図表2-4-1に示すように、この領域には、「自分がやらなければならないことは責任をもってやり抜くようにしている」といった「責任感」や課題をやり抜く力、「むずかしいことでも、失敗をおそれずに取り組んでいる」という「勇氣・熱意」、「家族を尊敬し、大切にしている」という家族への尊敬や「思いやり」、「いつも新しいアイデアを考えたり工夫したりしている」という「創造的態度」、「自分と違う意見も大切にしている」という「バランス感覚」や異なる意見・価値観の受容力など、豊かな人間性を表すと考えられる7つの項目を含めている。

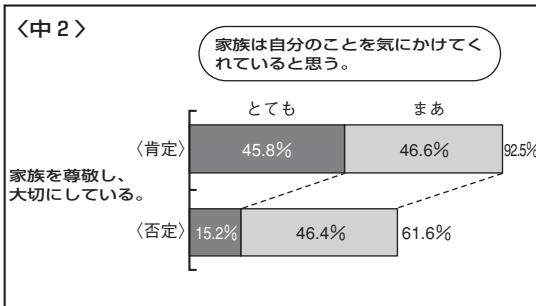
「やらなければならないことは、責任を持ってやりぬくようにしている」という設問では、小5生、中2生とも同様な回答傾向を示し「とてもあてはまる」と回答する割合は、共に30%程度となっている。この項目は、集団の中での与えられた課題を責任を持ってやり通す力を示すものであり、課題を達成する喜びを仲間と共に味わう集団的な成功体験・達成体験を呼び込む力でもある。また、同時に、周囲の人からの信頼を得、集団の一員としての存在を認められるようになるための必要な力と考えられる。先に図表2-3-2で「ものごとをやり遂げた喜びを味わったことがある」という「達成経験」(学びの基礎力)の自己評価は、トップボックス

の数値で、小5生59%、中2生56%という相対的に高い水準にあることを見た。先に述べたように、課題を責任を持ってやり抜く力は「達成経験」を呼び込む力の一つと考えられ、また逆に、「達成経験」は次の課題をやり抜く力を強め支えると考えられるのであるが、後者の数値のほうが高い割合を示している（つまり、後者のほうが前者の力を獲得することに比べて易しい）ことから、両者は相互に高め合う関係にありながら、どちらかと言えば、個人的な成功体験を含む「達成経験」の積み重ねのほうが、与えられた課題（集団的・社会的な役割課題）をやり抜く力が育つ‘土壌’、前提的な条件の一つとなっていると考えられる。

「自分とちがう意見も大切にしている」という設問に「とてもあてはまる」と回答している割合は、小5生で22%、中2生で14%となっている。「まったくあてはまらない」と積極的に否定している割合は、小5生、中2生共に5%程度にすぎないものの、自分の意見と異なる意見に出会ったときに、人の意見を尊重してまず受け止めるという姿勢は、全体として弱いようである。他者の意見、価値観をまず受け止め認めることのできる力は、感情的に反発したり、独り善がりになることなく、他者とのコミュニケーションをとっていく上で必要な力であり、良好な人間関係を築いていくためにも欠かせない力の一つである。

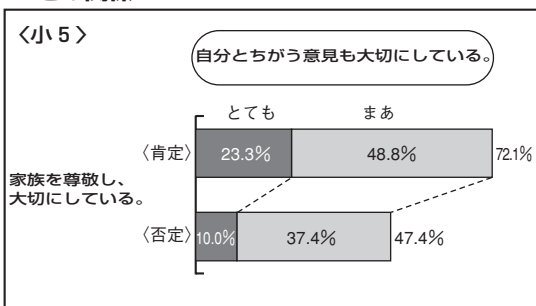
「家族を尊敬し、大切にしている」という設問では、小5生では55%、中2生では30%が「とてもあてはまる」と回答している。「まったくあてはまらない」という回答は、小5生では2%、中2生では6%程度となっている。中2生では、トップボックスの数値がかなり低いが、これは、中2生の精神的・肉体的な発達段階の特質（思春期の特質）を反映しているものと考えられよう。

■図表 2-4-3 「家族を尊重」する気持ちの肯定・否定と「家族が自分のことを気にかけてくれていると思う」との関係



図表 2-4-3 は、「家族を尊敬し、大切にしている」という設問に対する肯定・否定と「家族は自分のことを気にかけてくれていると思う」（学びの基礎力；家族との支え合い）の回答との関係を示すものである。「家族を尊敬し、大切にしている」という設問に肯定的に回答できている子どもは、否定的な回答をしている子どもよりも「家族は自分のことを気にかけてくれている」と思う割合がかなり高いのである。この図表は中2生についてのものであるが、小5生についても同様である。すなわち、「家族を尊敬し、大切にしている」と子どもが思うことができるのは、子ども自身も家族から尊重され大切にされていると思うことができる場合である。共感的に共に育ち合うような家族関係が大切であることを示していると言えよう。

■図表 2-4-4 「家族を尊重」する気持ちの肯定・否定と「自分と違う意見も大切にしている」との関係



また、図表 2-4-4 は、「家族を尊敬し、大切にしている」の肯定・否定と「自分とちがう意見も大切にしている」という設問の回答との関係を示すものである。この図表から読み取れるように、「家族を尊敬」している子どもでは、そうでない子どもよりも自分と異なる意見も大切にできる子どもの割合が高いのである。この図表は小5生についてのものであるが、中2生についてもやはり同様な傾向が見られる。このことは、家族の中でともに尊重し大切にし合えるような人間関係が、子どもに異なる意見や価値観を受容できる力を育むことに寄与していることを示していると考えられる。

(4) 「4. 自己成長力」に関する回答結果

「自己成長力」の領域には、「自分の力をできるだけ伸ばしたい」という自分を成長させていく努力・行動のベースとなる成長意欲（成長動機）、「どんなことが自分に向いているのかを知っている」という自己理解の力（自己評価力）、「将来の夢や目標を持っている」という将来像を描き目標を設定する力（自己実現力）、「将来やってみよう仕事について、家族と話すことがある（中2生は「希望する進路について、自分でよく調べている）」という進路に関して探究する力（進路決定力）、「自分はまわりの人から認められている」という自尊心（自信・自尊感情）など、計6つの項目を含んでいる。

まず、「生きる力」のすべての項目の中で最も高い自己評価を示している「自分の力をできるだけ伸ばしたい（中2生では「能力）」という設問に注目してみよう。この設問では、単に勉強面だけでなく、スポーツや芸術などの分野も含む広い意味での力がイメージされているものと考えられるが、この設問に「とてもあてはまる」と積極的に肯定する割合は、小5生で62%、中2生では69%であり、この値は、「生きる力」のみならず、前節で見た「学びの基礎

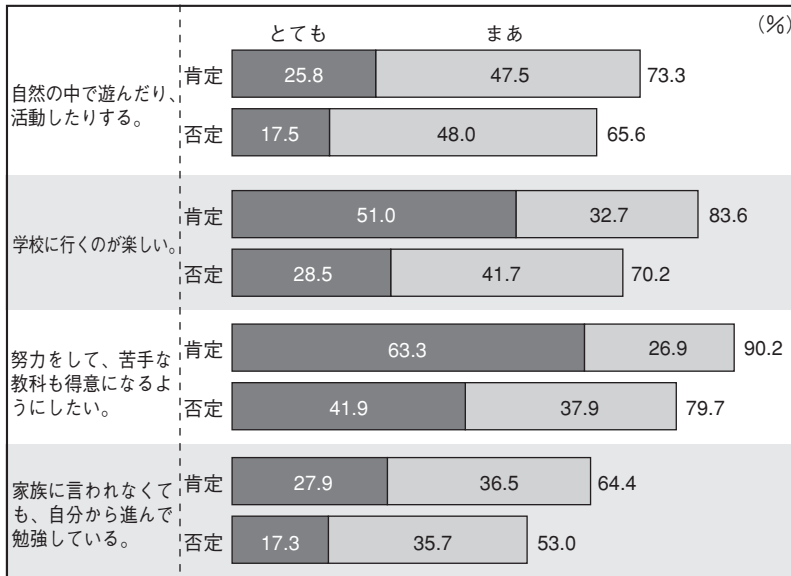
力」の項目全体を通して、「朝食は毎日食べるようにしている」の設問を除けば、最も高いのである。さらに、「生きる力」の項目の中で、小5生と比べて中2生のほうが自己評価が高まっている数少ない項目の一つである。

もっとも、見方を転ずれば、このような「自分の力（能力）をできるだけ伸ばしたい」と思う「成長動機」、すなわち、学習活動（スポーツや芸術のような活動を含む）に向かうにあたって前提として成立していると考えられる意識でさえ、小5生では約4割、中2生でも3割程度、少なくとも積極的には肯定できない子どもたちがいるのである。「自分の力を伸ばしたい」と思わない子どもとはどんな子どもであろうか。もう十分力がついているからこれ以上伸ばさなくてもよいと思っている子どもたちであろうか。次章の図表3-2-10と図表3-2-11に見るように、この項目の回答と「教科学力」レベルとの関係を見ると、教科学力の上位層ほど「自分の力をできるだけ伸ばしたい」と思っており、教科学力の下位層ほど、伸ばしたいとは思っていない子どもが多いことがわかる。つまり、先ほどの予想は成り立たない。これらの図表は、教科学力の視点からのみ見たものにすぎないが、「自分の力を伸ばしたい」とは思わない子どもには、一種の諦めや自己否定的になっている子ども（自己の資質への見限りや不信）、能力を伸ばすことに意味を見出せないでいる子ども（努力の価値の喪失）、目標となる対象（お手本）がなく能力を今より伸ばしている自分がイメージできない子ども（ロールモデルの不在）、あるいは人間不信の中で自分が存在していること自体の意味も希薄化し努力以前の深い課題を抱えた子どもなど、その子どもの状況は必ずしも一様で

はないと思われる。

「将来の夢や目標を持っている」という設問に目を転ずると、小5生では先に見た「成長動機」とほぼ同様な自己評価となっているが、中2生では、「とてもあてはまる」という回答の割合は、小5生62%と比べて20ポイント低い43%となっている。前回の調査では、これに該当する設問「将来つきたい仕事や夢を持っている（中2生は「将来つきたい職業がある」）」について、トップボックスの数値を見ると、小5生69%、中2生47%であり、質問の中味にやや違いがあるとは言え、今回と同様な傾向を示している。すなわち、小学生から中学生になる過程で、それまで抱いていた将来への夢や目標を失う子どもが少なくないのである。今回の調査にはないが、前回の調査では「自分のことが好きである」という設問への肯定的回答も、トップボックスの数値で、小5生36%に対して中2生は16%と半減していることが注目される。これは、中2生の段階が、人間発達の段階として、自分の「夢」と自分自身の能力・適性や、社会の現実との調整が始まる段階にあり、自分の適性や社会の厳しい現実と、これまで抱いていた夢や将来イメージとのアンマッチに気づき、「夢が破れ」目標を失う子どもも生まれてくること、そして、自己否定的となり自信を失う子どもも生まれてくることを意味している。これは、思春期の特徴の一つに他ならないであろう。しかし、それまで抱いていた夢が叶わず目標を失ったとしても、子どもたちは先に見たように「自分をできるだけ伸ばしたい」という成長への意欲は失うことなく維持し、やがては自分により相応しい新たな夢の模索＝目標の捉え直しに向かっていくのである。

■図表 2-4-5 「将来の夢や目標がある」の肯定・否定と他の項目の回答との関係(小5)



図表 2-4-5 は、「将来の夢や目標がある」の肯定・否定と他のいくつかの「生きる力」等の設問の回答との関係を見たものである。「将来への夢や目標」があると答えた子どもは、そうでない子どもよりも、学校に行くのが楽しいと感じている割合が高く、「家族から言われなくても、自分から進んで勉強している」と答える割合も高いのである。やはり「将来への夢や目標」があることは、学習活動への意欲を高める要因となっており、物事への積極性を生む原動力になっていると考えられる。

図表 2-4-1 に戻ると、「将来やってみたい仕事について、家族と話をすることがある」(小5生)、「希望する進路について、自分でよく調べている」(中2生)という設問への回答では、「とてもあてはまる」と回答している割合が、小5生 40%、中2生 17%であり、「将来の夢や目標がある」と回答している割合よりかなり低い数値となっている。将来への夢や目標があったとしても、それについて家族と会話を交わしたり、自分でよく調べたりするという行動に移ることは、必ずしもスムーズには進まないことがわかる。自分の将来の夢やつきたい仕事につ

いて、家族と話ができるという環境は、夢をふくらませたり、視野を広げて冷静に考える機会となり、また、夢が破れたときも支えてくれる存在となるだろう。「将来への夢」を持つということは、ある意味で、子どもなりの価値観に基づく「社会的な価値」の選択を行うことである。言い換えるならば、子どもが「将来への夢」を持つということは、社会の機能・働き(=価値)を(感動的な体験を通して)受け止め、将来の自分像の候補として描いたことを意味している。これは、社会への、またその価値を担う人々への子どもの素朴な信頼感の表明でもある。学校でも、子どもの夢を育む様々な取り組みが行われているが、大切なことは、子ども一人ひとりの夢=社会的な価値の選択を尊重しながら、子どもの‘夢の交流’を通して「社会に存在する多様な価値」を学び合う活動とすることであろう(=夢を育てる活動の社会化)。これによって、子どもは自他ともにその社会的な価値(すばらしさ)を認め合っている多くの選択肢を得ることが出来るのである(詳細は、前回調査の報告書『21世紀型学力を育む総合的な学習を創る』第5章「子どもの将来の夢を育む学習」参照)。

自分の将来への目標を定め展望を描くにあたって、「自分に向いていることは何か」を知ること、社会の現実を知ることと合わせて欠かせないことは言うまでもない。実際、高校の進路学習では、社会に目を向けさせる活動（＝社会知）とともに自己理解（＝自己知）のための活動に力を入れているケースが少なくない。「どんなことが自分に向いているかを知っている」という今回の設問では、「とてもあてはまる」と回答している割合は、小5生29%、中2生20%であり、子どもたちにとって、自分が何に向いているのか、自分は何者であるのかを把握することは、必ずしも容易ではないことがうかがわれる。「将来への夢や目標を持っている」という自己評価の高さとの差に思いやれば、改めて、多くの子どもたちの夢や目標というものは、自分の能力・適性とは、さしあたり関わりのないところで成立している場合が多いことがわかる。

これは、自分が何に向いているかという適性・能力の理解というものが、学校や家庭・地域（そして、社会人においては職場）における幅広い分野での多様な個人的・社会的課題に取り組む活動を通して、自分に獲得でき発揮できた能力やスキルあるいは人間性が、他者による、集团的・社会的な評価をくぐり抜けることを通して、自己評価として次第に形成されていくというプロセスをとることと関係している。自己理解とは、他者からの評価と他者への評価の集積を通して次第に形づくられる社会的な産物である。将来の目標を持ち、その実現に向けて具体的な努力をしていく子どもになっていくためにも、自己理解のレベルを高めることは大切ではあるが、人間の能力の開花がもとより漸次的である以上、自己イメージを固定的に捉えることに陥らないようにこころがける必要があるだろう。とくに、小学校、中学校段階においては、様々な分野での多様な学習活動に取り組む経験を大切に、子ども一人ひとりの持てる資質・能力を多面的に育む活動こそ、その後の自己理

解を正しく行うことを助け、自ら進路を切り拓いていく力を育むことにつながっていくと考えられる。

最後に、「自分はまわりの人から認められている」という設問を見てみよう。この項目は、「生きる力」のすべての項目の中で、小5生、中2生ともに最も自己評価が低いものである。トップボックスの数値でみると、小5生では9%、中2生では4%にすぎない。反対に「まったくあてはまらない」と積極的に否定する割合は、小5生で14%、中2生では18%となっている。この設問を肯定する割合は、「先生に認められていると思う」（学びの基礎力；教師への信頼）の設問の場合よりも、さらに低い水準となっている。「まわりから認められる」ことによって、それを励みや支えとしてさらに自分を成長させるよう積極的に努力していくようになることが考えられるが、「まわりの人から認められている」という自己評価に至ることは、大部分の子どもたちにとって困難なようである。注目したいのは、第3章第2節の図表3-2-10と11において、この項目と「教科学力」のレベルとの関係を見ると、上位層のほうが高いとはいえ、おしなべてこの項目の自己評価は低いことである。また、「友達から認められるような得意ことがある」（学びの基礎力；自己有能感）という設問の肯定率からも隔たりがあることから、単に周りより優れた特技的なものがあるだけでも異なるのである。一つの仮説として考えられることは、この項目の意味するところは、子どもが属する集団の中での自分（という個性）の存在価値、どれだけ自分が集団やその構成員に対してよい影響を与えられる存在であるかの自己評価のレベルを測る指標であるということである。その意味で、同様に「学びの基礎力」の中で、中学生にのみ問うている「自分の意見や行動は、周りの人に良い影響を与えていると思う」という自己有能感を測る設問に近いのかもしれない。そのような存在になるためには、単に成績が良

いとか特技があるだけではだめなのである。集団・社会に対して何ができるか、集団が課題とすることにどれだけ貢献できるかが大切なのである。そのためには、集団の課題を発見・把握しその解決に向けて見通しのある計画を立て、論理的思考力を発揮して解決の具体的な姿を導き出し、それをわかりやすく表現して周囲を納得させるための自己表現力など、いわゆる先に

見た「問題解決力」的な力も求められてくる。これらの問題解決力の育成も回りつつ、子どもたち同士が相互に長所をほめ認め合ったり（個性の尊重）、活動の成果を認め合いかつ率直にアドバイスし合うといった、相互によい影響を与え合い成長を刺激し合うような場（個性同士の切磋琢磨の場）を豊かに持っていくことも大切と考えられる。

2 小5生と中2生の比較

「生きる力」についても、全般に小5生に比べて中2生のほうが自己評価が低いのは、前節でもふれたように、「学びの基礎力」の場合と同様である。前回の「生きる力」の調査の場合も同様な結果を示している。ベネッセ教育総研が行った他の調査でも同様な結果となっており、これは普遍的な傾向である。

今回の「生きる力」の調査で、中2生のほうが小5生と比べて、自己評価が高いのは図表2-4-1に見るように「電子メールを使ったり、インターネットに書き込みをしたりするときは、きまりを守ったり、相手の気持ちを考えたりする」というメディアリテラシーに関する設問と、「自分の力をできるだけ伸ばしたいと思う」という「成長動機」を問う設問の2つのみである。

このように小5生に比べて、中2生の自己評価が全般に低いのは、基本的に「学びの基礎力」

について指摘したことと同様な要因が当てはまると考えられる。

すなわち、

- ① 人間の発達段階としての思春期の特質の反映。
- ② 上記①と関わるが、小学生に比べて自己評価基準が高まっていること。
- ③ 中学校では「生きる力」を育むような活動を体験することが相対的に少ないこと。

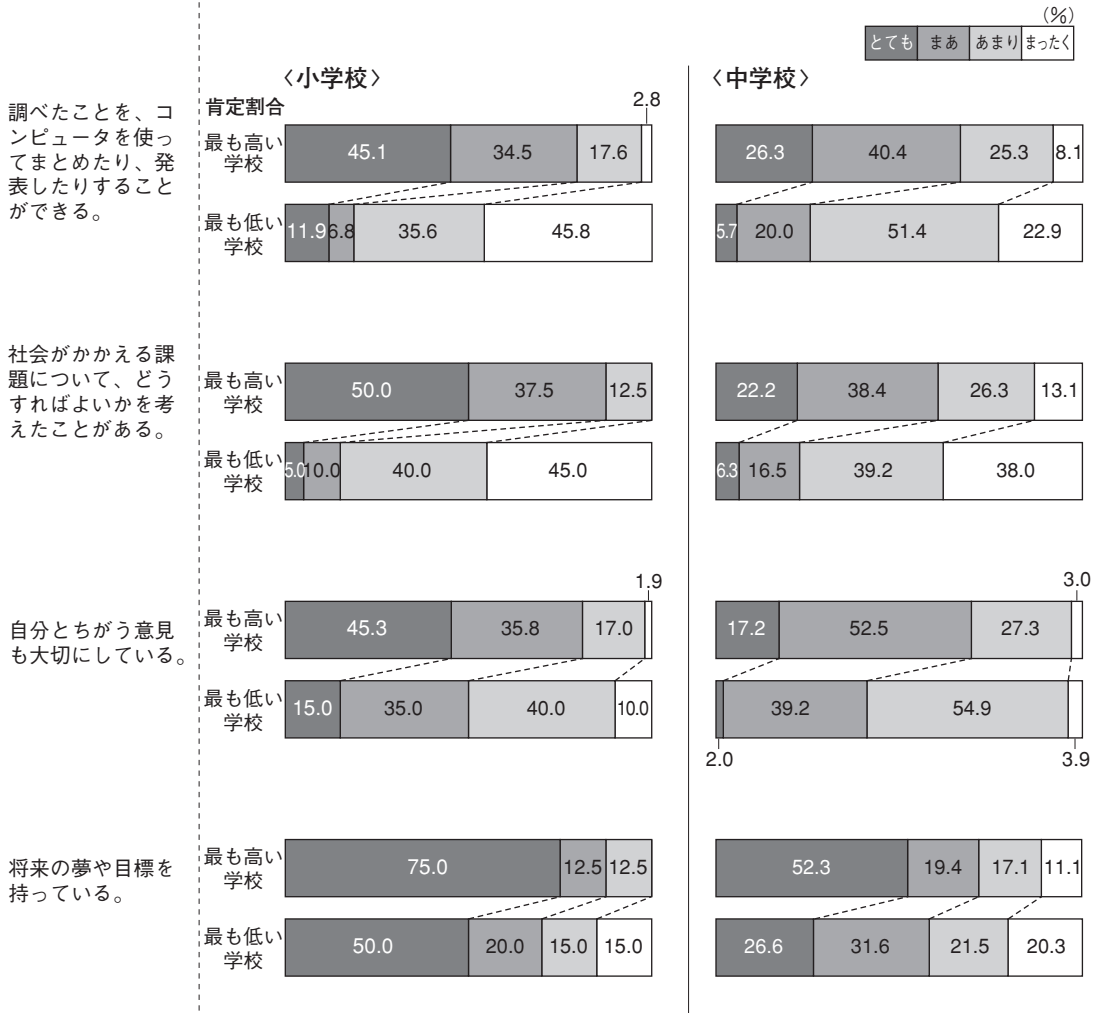
学校現場では、発達段階の特質を踏まえた上で、「生きる力」を育む取り組みをどう展開していくのかの工夫が求められている。その際、一つのポイントは、将来への夢や目標を失い自信を喪失している子どもたちに、再び夢や目標をどう育み、どのように努力の方向（成長の方向）を見出させていくか、すなわち「自己成長力」の領域の力をどう育てていくかにあろう。

3 「生きる力」の学校間の格差

図表2-4-6は、「生きる力」のいくつかの項目について、子どもの自己評価が最も高い学校と最も低い学校とを対比させて見たものである。この図表で、例えば「調べたことをコンピュータを使ってまとめたり、発表したりすることができる」という項目について、小学校と中学校の最も高い学校と最も低い学校では、トップボックスの数値についてみると、小学校では、45%と12%、中学校では、26%と6%となっている。また、「将来の夢や目標を持っている」

という項目について同様な比較をすると、小学校では、75%と50%、中学校では、52%と27%となっており、大きな格差があることがわかる。「生きる力」についても、「学びの基礎力」の場合と同様に、ほとんどの項目で学校による大きなバラツキが見られるのである。これには、「学びの基礎力」の場合と同様に、地域的な学習環境の違いとともに、学校独自の取り組みの違いも反映されていると考えられる。

■図表2-4-6 「生きる力」の学校間の格差(個別項目の例)



おわりに

以上、「生きる力」の自己評価の現状を見てきた。また、部分的に「学びの基礎力」の項目との関係にもふれてきた。なお、両者の関係に関する基本仮説については、第3章2節で改めてふれている。

また、「生きる力」は、具体的にどのような学

習活動を通して育成していくかということについては、前回の調査報告書『21世紀型学力を育む総合的な学習を創る』において、実証的な研究報告がなされている。今回の結果と合わせて参照していただければ幸いである。